

ニューヨークの日系人と天理教伝道 ①

おやさと研究所講師
尾上 貴行 Takayuki Onoue

ニューヨークの日系人コミュニティ

戦後の天理教アメリカ伝道の特徴の一つとして中西部や東部への伸展があげられる。現在でも天理教の教勢は西海岸地域に集中しているが、東部においても天理教ニューヨーク・センターを中心として様々な活動が行われている。西海岸と同様、その伝道の歴史には日系移民の存在が小さくない。

戦前

日本人が最初にニューヨークを訪れたのかは定かではないが、1860年に日米修好条約批准のために江戸幕府の役人一行が訪れ、歓迎を受けたとされる。また1860年代後半には日本から留学する者も現れた。1872年に領事館が設置され、初代領事として富田鉄之助が着任した。当時ニューヨークに在住する日本人はわずかであったが、将来の日米貿易を見据えての設置であった。実際、1880年頃には貿易商が開業し、三井物産や横浜正金銀行の支店が設置されるなどの動きが見られた。そして日清戦争、日露戦争、またセントルイスで開催された博覧会などにより、アメリカ社会で日本の認知度が徐々に高まっていった。

1900年代に入ると邦字新聞社、様々な日系人組織や団体が形成されるようになった。1907年に日本人の相互扶助を目的として「日本人共済会」、1914年にはアメリカ東部の代表的な日系機関「ニューヨーク日本人会」が設立された。日系宗教界でも、1899年に「紐育日本基督教会」、1937年に「紐育仏教会」がそれぞれ設立されている。ニューヨーク総領事館の1939年の調査によれば、当時ニューヨーク州に在住する日本人は2,372人で、その主な職業は、会社員、学生、物品販売業、官公吏・軍人、旅館・料理店、家事被雇人などであった。調査の備考には「在住者数に於て調査漏相当数あらん、実数は之以上に上るべき見込、地着筆頭は家内労働の500名余にして農耕方面僅かに27名は当地域の事情の反映であろう。」(新日米新聞社編1961年、1336頁)と記されており、西海岸地域とは異なる当時の在住日本人たちの様子がうかがわれる。

戦時中及び終戦直後

満州事変以降日米関係は悪化し、ニューヨークにおいても反日感情が徐々に激しくなっていった。1941年にアメリカ政府が在米日本資産を凍結すると、ニューヨーク在住の日米貿易関係者は多大な打撃を受けることとなった。そして同年12月7日に日米が開戦すると、FBIによる日本人拘引が即日始まった。翌8日の夜までに、ニューヨークでは100名以上の日本人(主に日本政府関係者、日本商社の社員、日系コミュニティの有力者など)が逮捕された(新日米新聞社編1961年、1341頁)。

このように開戦と同時に拘引された人、また開戦直前に日本へ引き上げた人もいたため、ニューヨークの日系人人口は戦時中かなりの減少をみた。1940年頃には約3,000人であったが、1942年には推定1,750人となった。その内訳は日系一世1,100人、二世650人で(同上、1343頁)、当時西海岸地域では二世数が一世数を大きく上回っていたことからすると、ニューヨーク在住日系人の特徴の一端がうかがわれる。また西海岸の日系人には根こそぎの強制収容が実施されたが、ニューヨークでは行われなかった。日系キリスト教会の牧師や仏教会の開教

師なども、一時的に収容されたものはいたが、教会の多くは閉鎖されることなく礼拝が続けられ、牧師や開教師なども、管内の信者を訪ね慰問するなどの活動を行っていた。

連邦政府の日系人転住政策により、収容所から出所した日系人は、当初西海岸地域に戻ることが許されなかったこともあり、中西部や東部へ転住するものも多かった。1950年代には、ニューヨークへの在住者も増加し、日本クラブ、日本商工会議所、日系人会などの諸団体も再興されていった。アメリカ政府の国勢調査によると、1950年に3,893人であったニューヨーク州の日系人人口は、10年後の1960年には8,702人と倍増している。この背景には二世世代による日系人コミュニティ形成、日本商社の進出や「軍人花嫁」の渡米、また移民法改正による新移民の増加などがあつた。

現在

アジア・アメリカン・フェデレーションの2013年の調査報告では、ニューヨーク市在住の日系アメリカ人の人口は31,649人であり、そのうち57%はマンハッタン、23%はクィーンズ、17.5%はブルックリンに在住していた。同市の日系アメリカ人人口は、アジア系集団の中では7番目であり、在住者の一般的な傾向として、高学歴、高収入、低貧困率などがあげられる。また外務省の海外在留邦人数調査統計によれば、2016年10月1日現在、ニューヨーク都市圏の在留邦人数は46,917人であった。

現在ニューヨークに在住する日系人は、戦前に移住した一世やその子孫たちの歴史や活動を土台としてコミュニティを形成し、1960年以降のアジア系移民の増加、エスニック・リバイバルの動きともあいまって、様々な活動を活発化し、発展してきた。現在「ジャパントウン」の象徴として考えられるのはマンハッタンのイースト・ビレッジ地区西部であり、日系人経営によるレストランや商店も多く、マンハッタンの中でも最も日系人の多い地域のひとつである。しかし、ニューヨークに形成されている多様なエスニック・コミュニティの中で、日系人コミュニティは、チャイナタウンやコリアウェイのように自らの存在を主張しているように見え、存在感があるコミュニティと違い、表面的にはそれほどその存在を認識されていないように思われる。また「自分探し」のためや日本社会を逃れて渡米して来た日本人たちなどが日系人コミュニティから距離をおく傾向もみられる。その一方で彼らは、日本人協会や邦字新聞社などがあるミッドタウンや日系人居住者の多いフラッシングなどとネットワークとして繋がっている。また日本との繋がりを有したまま生活している日系人も多く、現在の日系人コミュニティは、ニューヨーク社会に拡散しながらも緩やかに結ばれたトランスナショナル的側面をもっていると考えられる。

[参考文献]

- 木村昌人「ニューヨークと日本人社会」柳田利夫編『アメリカの日系人：都市・社会・生活』同文館出版、1995年、87～116頁。
- 新日米新聞社編『米国日系人百年史—在米日系人発展人士録』新日米新聞社、1961年。
- 広田康生・藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ』ハーベスト社、2016年。